

## 「ソロモンへの体験的経済支援」

高濱 清(日本・ソロモン友好協会理事長)

私が米国勤務を終えソロモンの日本大使館の責任者として赴任したのが例のガダルカナルとマライタ間の部族抗争が終焉し未だその煙が消えやらぬ2002年3月でした。現地の治安状態は少しずつではありますが回復の方向に向かっており、日本の外務本省もその実情を把握すべく調査団を派遣してきました。自分としては抗争により弱体化したこの国の経済建て直しにいかなる協力が出来るかを考えたときに、やはりODAを通じた支援であると確信し、特に草の根無償支援を中心に支援を開始しました。今自分の手許に当時の大使館の職員が私の仕事に関する報道振りを整理してくれた記録があります。久しぶりに懐かしく眺め、今回の講演において紹介すべく何件ぐらい支援を行ったのかを数えて見ましたら50件ありました。その中にはサイクロンによる被害支援のための緊急援助、基礎的薬品の供与、マラリア対策としての顕微鏡50台供与、全島にわたり学校校舎建設、給水事業支援、電力事業支援、青少年育成センター建設などを実施しました。無償支援としては、2003年にホニアラ国際空港修繕計画(約7億円)の実施決定にこぎつけました。他方、海外青年協力隊員は、私が赴任した時期には治安に係わる危険度が高かったため全員ソロモンから引き上げましたが、2003年10月には諸般の事情を考慮しソロモンに対する危険度の引き下げを決定し、以後協力隊員が徐々に戻ってきました。現在では20名近くが都市開発、農業、教育などの分野で活躍していることを知り誠にうれしく思っています。ご参考までに2009年には、日本政府としてギゾ病院再建計画に19億円、ホニアラ、アウキ市給水設備計画に20億円の無償支援を決定しています。

いずれにしても、ODAは日本外交のツールであることは今も変わりなく、中国のアフリカ太平洋などで存在感を増しているこの時期に、巷間叫ばれています「弱まった日本の外交力」を強化するためにもODA経費を国家予算の中で増やしてゆく必要があります。情けは人のためならずの気持ちが必要で。

さて次に残る強烈な思い出ですが、平成15年7月、ホニアラ国際空港に突如約2000名近い兵士が軍用機から降り立った時のことです。これはソロモン独立支援グループ(RAMSI)と呼称された集団で一応国際軍という形をとった豪州軍中心の部隊でした。目的はソロモンの当時の首相(ケマケザ氏)の要請に応じて、同国の治安回復を徹底する(当時ガダルカナルの叛乱分子とマライタの叛乱分子の対立がまだあった)ために派遣されて来たものですが、空港に兵士等が駐留するためのテントが多く張られ、武器を持った兵士が闊歩し緊張感が一挙に増しました。この動きに対し一時豪州による新植民地主義化が進むのではとのうわさが広がりましたが、その後の彼らの動向を観察の上、日本政府も最終的にはRAMSIを支持する表明を行いました。その後平成15年8月15日、マライタ島において対立分子間の和解と武器放棄(Free Weapon)のための儀式が行なわれ、私もRAMSIの軍用ヘリコプターで現地

入りし、この儀式に参加してきました。これ以後ソロモンの治安が急速に良くなったこと言うまでもありません。因みに同年8月22日



には外務省の矢野副大臣が、大洋州課長を同行の上RAMSIの実態視察に見えと共に、ちょうど予定されていた草の根無償支援のオープニングの儀式にも参加されました。

最後にソロモンを語る上で忘れてはならないことは、今から68年前の1942年8月から1943年2月7日までガダルカナル島で繰り広げられた日米両軍の死闘です。日本軍が米・豪軍分断のための前進基地としてガダルカナル島に建設した空港の争奪をめぐるこの戦闘は日本の敗北に繋がる戦いの始まりとなり、これ以後の戦いにおいて、日本軍が再び勝利することはなかったのです。日本軍3万余名が参加したこの戦闘で約20000名の兵士が戦病死(ほとんどが餓死)海軍は多くの艦船と飛行機を失いました。米軍の戦病死数は約5000名ということでその差に驚かされます。それでは、何故日本軍はかくもろく敗北したのでしょうか。詳細な検証を重ねて書かれた名著「ガダルカナル戦記」の著者亀井宏氏は次のように言っています。

「陸上戦闘では、武器、装備類も米軍に比べ貧弱、海上補給、陸海軍戦力の統合の欠如、軍全体の統帥の欠如などの問題はあったが、日米両軍の戦争全体に対する考え方の違いがもろくも露呈した。言い換えれば、当時の日本人の思考性-ひいては国民性の違いを示した戦いで、旧軍の事大主義、独善、驕りといった体質は果たして当時の指導者だけの問題だろうか、現在に置き換えて考えて見たとき日本の政治、経済界の本質・実態はあまり変わっていないのではないか。米軍は戦争終結に対する考え(日本本土で止めを刺す)がはっきりしておりガダルカナルの戦闘はその過程と捉えていたが、日本軍がこの戦いを局地戦と見ておりこの戦争自体の最終的な収束案たる図式を持っていなかった。この姿は現在の日本の政治・経済のあり方にも見られる」と…。

結局、先の戦いでなくなった多くの兵士は、長い瞑想から日本人を覚醒させるための身代わりとして死んでいったように思われます。どのように日本の国づくりをすべきなのかその方向性・姿が見えず、「船頭多くして船山に登る」の例えのごとく無駄な議論が行なわれる中ではずるずると国際社会での日本の地位が落ちてゆく現状に戦死された多くの兵士はどのような気持ちで今の日本を天から見ていることか、それを考えると心が痛みます。しかしソロモンは親日的な国です。「一寸の虫にも5分の魂」のごとく侮ることなく日本としては大事にソロモンと付き合いゆく必要があるでしょう。